

審査の結果の要旨

氏名 常岡 充子

本論文は、記憶が正確に残っているかどうかを自律神経系反応によって識別する新たな手法を開発するために、有効な自律神経系反応が存在するか否かを検討したものである。本論文は全4章から構成されている。

第1章では自律神経系反応と記憶との関係に関する先行研究を概観するとともに、本研究で扱う自律神経系反応の発生機序を詳述している。犯罪捜査において自律神経系反応を用いて記憶を調べる手法である隠匿情報検査を詳細に検討し、その問題点を指摘している。その上で、1) 自律神経系反応が、「見聞きした」という実際の学習経験と「憶えている」という主観的な判断のどちらを反映しているのかを明らかにすること、2) 学習経験の有無を識別できる自律神経系反応があるかどうかを調べることに、という2つの研究目的を設定している。

第2章では、隠匿情報検査において自律神経系反応が主観的な判断を反映することを示した先行研究の追試を行うとともに、隠蔽意図という先行研究では未検討の要因を測定している。実験の結果、犯罪捜査で使われてきた隠匿情報検査では、自律神経系反応が主観的な判断と学習経験のどちらを反映しているのかを識別できないことが示された。さらに一部の自律神経系反応が隠蔽意図の影響を受けていることも明らかになった。

第3章では、主観的な判断ではなく、学習経験のみを反映する自律神経系反応が存在するか否かを、再認課題によって検討している。実験の結果、学習経験のみを反映する自律神経系反応(例: 瞬時心拍数など)が存在することが明らかになった。

第4章では、第2章と第3章で得られた自律神経系反応について生理学的な発生機序を考察している。更に、今後行う新たな記憶検査の開発に関連して、幾つもの検査手法や解析方法などを提案している。

本論文で報告された実験はいずれも緻密に立案されており、新たな記憶検査を開発するために必要な知見を提供している。また、それらの知見を活かす手法も提案している。新たな記憶検査の開発にはさらなる検討が必要であるが、自律神経系反応を用いた記憶検査手法について重要な知見を提供する研究であることは疑いない。以上の点に鑑み、本審査委員会は、本論文が博士(心理学)の学位に値するとの結論に達した。